

弁栄聖者との邂逅

値遇

(1) 弁栄聖者の御生涯およびその宗教については、田中木又先生著「日本の光（弁栄上人伝）」、藤堂恭俊先生著「弁栄聖者」、聖者の御遺稿「光明の生活」・「人生の帰趣」・「無辺光」などを参照されたい。

戒浄上人が宮本契善師の御示唆により弁栄聖者、すなわち、仏陀禪那弁栄上人（安政六―大正九）に初めて御教示を仰がれたのは、大正二年（一九一三）聖者五十五歳、上人四十歳のときのことである。聖者は大正九年、六十二歳で御遷化になつていたので、それまでの約七年間、上人は聖者のみ教えをお受けになつたわけである。

上人は、契善師が亡くなられて間もなく、最初、聖者を東京浅草の誓願寺にお訪ねになつたが、そのときは御不在で、何でも在家の信者のお宅に御滞在在中



大谷仙界師

(2) 因みに、橋本徳岡氏の御教示によれば、山口氏は松戸の出身で二女があつたが、戦災で皆亡くなられたという。

とのことであつたので、さらにそのあとを追つて浅草千束町の山口鯛三郎氏宅に行かれ、お会いになることができたのであつた。⁽²⁾

聖者と上人との御対面に関しては、大谷仙界師が某氏に語られたという、次のような話が伝えられている。

あるとき(弁栄)上人のお伴をして東京市の某家へまいりました。上人様はその茶室にて法話やら仏画などおかきになつていられたとき、取次の方が笹本上人様が御面会にまいられました、と知らせてまいりました。笹本上人といえは大学出の宗大教授、若手のチャキチャキで、その頃から宗内に名声高く、むしろ上人の上にあるくらいでありました。

上人は「ハア左様で」と別に変つた御様子もありませんでしたが、私(大谷師)は、「これは見物だ、二人の間にどんな問答がかわされるか」と、頬杖つきながら興味をもつて眺めていますと、笹本上人は家へおはいりになりますと、次の間から最も厳肅な御態度で合掌、略懺悔をお称えになり、ついで仏前に向うように三礼せられました。

私はびっくりして見えますと、上人は手をおあげになつて「どうぞどうぞ」と半ば制するように、またお招きのような様子をなさいましたが、笹本上人はそのままで次のお部屋にはいられません。するとやがてするす

(3)「笹本戒浄上人しのびぐさ」六三―六四頁。

ると上人は笹本上人のかたわらにお進みなさいました。それで笹本上人は恐縮して後^{あと}ずさりされながら「如何致しましたら、このみにくい私が」と申され、あとは涙にくれました。

上人様は、「少しも心配は要りません。念仏をなさいませ」と仰せられまして、笹本上人は、「ハ、しかと左様で」と言われたまま、礼拝して直ぐに帰られました。⁽³⁾

大谷師は、このとき言うべからざる感慨にうたれて、聖者の偉大さと上人の人格とに敬服された、ということである。

み跡を慕いて

上人は、それから準備されつつあった、真如の実地認識に関する博士論文もやめ、一切の外縁を謝して、熱心に念仏三昧を修せられ、数か月後に再び聖者に面会された。また、聖者に師事されるようになって、これまでたくわえていた、みごとな口ひげも剃り落された、という。すなわち、上人は、学究生活をも断念して、一個の念仏者に徹しようとしたわけであるが、この点について後年、次のように述べておられる。



弁栄聖者

(4) 能見寿作氏稿「応病与薬」
二七・光明三〇四号。

法門は数知れずあります。実に大宇宙の真理というものを勉強しようと致しますと、もう興味津々たるものでありますが、これの一つ一つ究めて行こうと致しますと際限がありません。解脱が急がれて、それで一切を放棄して弁栄上人様の御跡をお慕い申す様になりました。⁽⁴⁾

上人の述懐

さて、話をもとにもどすが、聖者との御対面について、上人自身は、次のように述懐しておられる。

最初三拝いたしましたして「我昔所造諸悪業」の懺悔の文を唱えて無始以来の罪を懺悔した後、上人に申し上げました。「私は如来様の法身を理想としております」と。すると上人は「いいえ、私共の理想は如来様の報身であります。それ故、報身を本尊と仰がなくてはなりません」とお教え下さいました。それから自坊に帰りまして、「往生礼讃」等を改めて拝読いたしました。と、古来浄土教の祖師と仰がるる龍樹菩薩を初め、天親、曇鸞、善導等の諸師いずれも言を極めて報身阿弥陀仏のお徳を讃えてその慈光を仰いでおられる。この時以来長年唱えておった禅宗流の念仏を捨て、上人から頂

(5)「私の信仰が復活するまで」・全集中巻二六一―二七頁。

戴した三昧仏の尊像を掲げて念仏することになりました。しかるにお念仏中に、全く思いがけない言葉が、尊像に向かつて吐き出されます。「この木偶の坊！」と、口を衝いて出てまいります。その時心から懺悔して一心に念仏いたしました。こんな事がかなり久しい間続きましたが、遂に大慈悲の懷の中に帰らせて頂くようになりました。(5)

右の文章中に、上人が念仏中、尊像に向つて「木偶の坊！」という言葉をつかれたことが記されているが、このことについて、また、次のように述べておられる。

私、如来様のお木像、お絵像を木偶の坊などと考えたことはありませんが、長年法身を理想として無相無色の方に偏しておりましたので、このようないふことがおこつたのだと思います。この木偶の坊という言葉が出なくなつて三昧仏様を心から三拝九拜できるようになるのに三年ばかりかかりました。(6)

(6)泉虎一氏稿「直線道の御教」一・光明二五〇号。

三昧仏尊像をいただく

さきに引用した文章中に、上人が聖者からいただかれた三昧仏尊像をかがけ



聖者の上人宛お葉書類
(横浜 慶運寺蔵)

て念仏されたことがみえている。この尊像について、浄光師は、次のように記しておられる。

今も本堂の一隅に奉安せる絹地に淡彩の三昧仏の尊像は、父が弁栄上人に御指導をいただくようになって間もない頃、特にお願ひしていただいたものである。ちようど頂戴に上ったとき、父はこの尊像を拝して「大変尊い御相好だが、御唇の辺が勿体ないことであるが、一寸気に入らないナ」と心中に思った。すると上人は、こちらを向いてニツコリお笑いになり、「アノ、一心にお念仏しておりますと、この御唇辺から尊く感ずるようになります」とおっしゃった。父は忝く推し戴いて帰山し、爾来一昨年(昭和十二年)入滅に至るまで実に二十有余年、この尊像を唯一の御本尊と仰いでひたすら念仏三昧の生活に入ったのである。而して父がこの尊像を奉持する態度の懇懃さはなかなかのものであった。先ずこの御軸物が日に焦けることを防ぐため、その側の雨戸の一枚は、年中閉ざしたままにし、また尊像をはずしておしまい申すときには、必ず先ず香にて羽根ばたきを清めてほこりをお払い申し、しかる後新しい糊入紙二枚を尊顔の部分にあてお巻き申して、それを「弁栄聖者御筆雲上弥陀(三昧仏)末弟世本戒浄謹誌」と自ら表記せる桐箱にお収めするを常とした。

偏依并栄

(8)「笹本戒浄上人しのびぐさ」六九頁参照。

かつて、法然上人は「偏依善導」、鎮西上人は「偏依法然」であられたように、戒浄上人は「偏依并栄」、すなわち偏に并栄聖者に依られたのであった。このことは、某氏が「上人は少しも書物をお出しになりませんが、どうしてでございますか」と、たずねたのに対し、「私はただもう并栄上人様のお言葉のウンというところまで真似てお話させていただけばよいと思っただけでございます。ですから自分ごとき者の意見を書くというようなこと、全く考えてみたこともありません」と、答えられたことによってもわかる。(8)

また、朝夕のおつとめの際の礼拝儀のあげ方にしても、聖者のなまり、アクセントまで真似て申された、という。上人がいかに徹底的に聖者に依られ、かつ聖者を尊び、お慕いになっておられたかを、知ることができる。

現代の釈尊

上人がこのような聖者を渴仰、帰依されたのは、聖者がまさしく現代の釈尊

とも称すべき大宗教家であられたからである。上人は、「私の信仰が復活するまで」⁽⁹⁾の中で、次のように述べておられる。

(弁答) 上人はかつて一遍も自分は仏だと仰せになった事はありませんが、私共を御済度下さる御実力が、正確なる御伝記を通して見奉ることのできる二千五百年前のお釈迦様と、まさに同一のものがあらせられました。それ故に私共は、実に上人を現代の釈尊と信じて、その御教えを仰いでおったことであります。

私は以前『パーラヤナ』と申す経文の英訳を読んだ事がありました。この経典は現代の仏教学者一人も異存なく原始經典たることを許しているものでありますが、その中に次のような記事が載っております。お釈迦様という方は、人が心の中で質問をしますと、チャンとその心を知ろしめして、直ちに言葉に出してお答え下さるというので、當時有名でありました。ここにパーバリーと呼ぶ一人の婆羅門の師匠がおりましたが、長年一つの問題の解決が得られず悩んでおった矢先、釈迦族の中に仏が居るという事を聞きました、もし釈迦さんが真に仏陀ならば必ずやこの解決をしてくれるに相違ないと思い、十六人の高弟を遣わしてこの解決を仰ぐことになりました。弟子達の出発に先立ち師匠は次の事を注意しました。先ず釈迦さん

V. PĀRĀYANAVAGGA.

To the Brāhmana Bāvari, living on the banks of the Godhāvati, in Assaka's territory, comes another Brāhmana and asks for five hundred pieces of money, but not getting them he curses Bāvari, saying, 'May thy head on the seventh day hence cleave into seven.' A deity comforts Bāvari by referring him to Buddha. Then Bāvari sends his sixteen disciples to Buddha, and each of them asks Buddha a question.

1. VATTHUGĀTHĀ.

1. From the beautiful city of the Kosalas (Sāvatthi) a Brāhmana, well versed in the hymns, went to the South (Dakkhiṇāpatha) wishing for nothingness¹ (976)

2. In Assaka's territory, in the neighbourhood of Aśaka, he dwelt on the banks of the Godhāvati, (living) on gleanings and fruit. (977)

3. And close by the bank there was a large village, with the income of which he prepared a great sacrifice. (978)

4. Having offered the great sacrifice, he again entered the hermitage. Upon his re-entering, another Brāhmana arrived, (979)

5. With swollen feet², trembling, covered with mud, with dust on his head. And he going up

¹ *Ākiṇṇasīlā*.

² *Uggha/apādo* u maggakkamaṇiṇa gha/apādatato paṇhi-kāya vā paṇhikam gopphakena vā gopphakam gāṇṇukena gāṇṇukam āgantvāpi gha/apādo. Commentator.

弁栄聖者作仏跡参拝記念釈尊
説法像
(奈良 石谷あさの刀自蔵)



が仏であるかどうかを人相の上で見てもraitたい。もし仏ならば身に三二相を有しておられるはずである。しからば次^に心の中で問うてもraitたい、その一つは「私共の師匠バーバーは普通の人と異なつた人相が何処と何処とにありますか」と、もう一つは「私共の師匠は吠陀^{ベダ}經典の第何節と何節とに通じておりましようか」と。もし釈迦さんが仏ならば此方の心を知ろしめして、いちいちお答え下さるはずである。そうしたら初めて礼儀を正して私の疑問を呈して御解決を仰いで頂くようにと。

弟子達は遙々野を越え、山を越えて、釈尊のおられる処まで訪ねて参りました。林に近づく^と御説法の声が聞こえ、たくさんのお弟子の方が釈尊を取り巻いて聴聞しておられます。まず第一に釈尊の御人相を拝すと、確かに三二相を備えておられる。次いで二つの質問を心の中でいたしましたところ、釈尊はいちいち口に出してお答え下さった。そこで恭しく礼をなし、最後に師匠から与えられた問題の御解決を仰いだとあります。なおその時釈尊は、この十六人の弟子方のために懇ろに御説法下さいました筆録が、この『パーラヤナ』となつたのだと申します。

私共弁栄上人にお教えを頂くようになって、いよいよこの釈尊の御内観の決して空想的伝説にあらず、真実にして真実なることを上人の御事実

仏陀禪那号について

弁栄聖者の号である仏陀禪那に関しては戒浄上人は或る時には「三千界中心眼の前に唯仏あるのみ」の意であります」とお教え下さったこともあるし、またある時は和田真澄師の質問に対し「仏陀禪那とは徳本行者が、南無阿弥陀仏の異名」と仰せられしと同意味と拝察仕候」とお手紙で御返答下さったこともある。

(全集下巻四四〇頁参照)

梵語学の大家である荻原雲来博士が明治三十八年(三十七才)十月九日ドイツより帰朝され、その時の祝賀会に弁栄聖者も出席されたが席上、聖者が博士に、「仏念の一念になり切っているこの事実を専門の立場からは何といえますか」と聞かれると、博士は「仏陀禪那」と答えられたという。これは弁栄聖者より戒浄上人が直接承われたことである。世上、この戒浄上人のお話を聞いて、それで聖者が自己の

よって確信することを得ました。

四大智慧の事実

それは弁栄上人の四大智慧に就いていつも申し上げるところであります。が、只今も二、三の例を申し上げる事にいたします。

その一

唐沢山に私がお伴いたして参った時、念仏中に「どうも自分は今までかなりお念仏して来たが、未だにこれという御恵みも頂けない。あるいは念仏が自分に適しないのかも知れないから、一つ坐禅でもしてみようか」と思いました。すると、上人様はツト、後を振り返って、ただ一言「宗旨を換えてはいけません」と仰せになりました。

その二

またあるキリスト教の牧師の人が弁栄上人の評判を聞いて、一つ試してみようと思い、他人名儀の名刺を持って上人を訪ねました。「一体仏教でい

号となさったのだ」と速断する人があったが、それに対して田中木又先生は「聖者が人から教えてもらつて、それを御自身の号となさるといふような不見識なことをされるはずはない」と言われた。

しかし聖者がすでに仏陀禅那号を明治三十年一月刊行の書籍等を使用せられている事実は山本空外博士編「弁栄上人書簡集」(五十一頁)を参照すると明らかであるから、荻原博士の御返事は、たまたま「符節を台わすが如し」だったと見るべきであらう。

う地獄極楽などというものは、事実あるのですか」と問う。上人は折り返し「キリスト教で天国地獄と言いますが、事実あるのですか」と。いいえ、私は無宗教者で分かりません」とすると、上人厳然として「いやしくも宗教を説く者は、嘘偽を言つてはなりません」この一言で彼の牧師の人は直ちに上人に就いて無二の念仏者となりました。

その三

次に、これは私が松尾真善上人から直接承わった事ではありますが、弁栄上人が朝鮮満州を御巡教中にこういう事がありました。当時松尾上人は京城の京城学堂という学校で、半島子弟の教育に携わつておられました。一日弁栄上人に講演をお願いいたし松尾上人自ら通訳の任に当るになりました。御講演の始まるに先だつて松尾さんは弁栄上人にお願いいたしました。「通訳という事は大変難しいものでありますから、なにとぞ御講演を少しづつ区切つて頂きとうございます」と。しかるに弁栄上人の講演は、前もつてお願いしたにもかかわらず、のべつ幕なし、だからだと、どこが頭やら尻尾やら容易に区切つて下さらない——これは、松尾さんが私にお話し下さった時の言葉をそのまま申したのであります——そのため講演の



弁栄聖者と共に（大正五年一月、東京にて。聖者の左は柏崎極楽寺住職龍島順故師、同夫人サキ子様。弁栄聖者御写真帖」所収）

要旨を箇条書きにして覚えていた心算でも、つい、大切な箇所を一つ二つ通訳し洩らしてしまいます。すると続く御講演のまっ最初には必ずその洩らした点を繰り返されました。初めのうち、二度三度はさほどにも思っていないかった松尾さんも、講演の続きを始められるたびごとに必ず今の通訳洩れの箇所の補いをされるので、遂にはそのたびごとにゾクッゾクッと背に冷水を浴びる思いがしたと申します。

私が考えますのに、弁栄上人は朝鮮語を御存知なかったものと思われるます。しかるに上人が、今申したように松尾さんの通訳洩れの箇所を一々補足せられたのは、松尾さんの通訳した講演の言葉聞いて不足を補われたのではなく、松尾さんの念頭に浮かび来り、浮かび去る一切のものを上人はちゃんと直観しておいでになったという証拠になります。これは先程の『パーラヤナ』に載っている釈尊の御内観の力と同じく、人が心の中に思うようなことに至るまでの一切を知ろしめす大円鏡智のお働きであります。

その四

もう一つ申し上げます。これもまた私が最近野々村学念上人から承った事実であります。野々村上人の御住職地の近くに、やはり現在一カ寺をも



弁栄聖者御筆法然上人三首道
詠両手・口同時廻書

つておられる浄土宗の僧侶の方で、お名前を忘れましたが、仮りにAさん
といたします。そのAさんがまだ宗教大学在学中の事でありました。ある
日、弁栄上人を御招待申し上げて有志の人たちとその御講演を聞いておら
れました。ところが講演がだいぶ進んでまいりますと、上人はフト話を止
めて「今この学生諸君の中に一人帰りの時間の事を大変心配している人が
ある。しかし、決して心配しなくてもよろしい。私の話はキツカリ四時に
終る。それから急いで駅に行けばいつもの汽車が今日は二十分遅れて着く
ので十分間に合う」と言われました。実はその学生の一人とはAさんのこ
とでありました。その頃、Aさんは東京から程隔たったお寺に寄宿してい
たのであります。もし何時の列車に乗り遅れると、自分の夕方の日課に差
し支える。上人の話は聞きたし、帰りの時間に遅れては困るしと、内心ひ
そかに心配を始めた訳であります。しかるに上人はそのすべてを御存知で
ありました。やがて四時になって講演が終わりますと、Aさんは急いで駅
へ駆けつけました。果せるかな、その日は列車が二十分遅延いたしました
ので無事に寺に帰る事ができたというのであります。私共の認識作用は
必ず目、耳等の五官および意識と色形、あるいは音声等の刺激とが結合す
るところに起こるのであります。ましてや他人の心を知るといようなこ

月かけのいたらぬ里はなけ
れともなかむる人の心にそ
すむ

柴の戸に明くれかゝる白雲
をいつむらさきのいろに見
なさむ

あみた仏といふより外は津
の国のなにわのこともあし
かりぬへし

大 詠

右宗祖 師の御

并 敬書

〔弁栄上人御遺墨集〕所収

（10）全集上巻一〇二—一〇六
頁。

とは、言葉の媒介なしには容易に分かるものではありません。

しかるに如来様の大円鏡智はかくのごとき言葉、あるいは色形等の媒介
を経ずして直ちに全宇宙一切を了々として知ろしめし給うのであります。

かくのごとく、上人様は実に念仏三昧に深く証入して御自身既に如来の三
身四智をそのままお具え遊ばしておられ、その御力をもつて私共を御済度
下さいましたので、遂に私のようなつむじ曲りの者も弁栄上人の御前に三
拝九拝してお導きを頂くようになったのであります。

なお、聖者の四大智慧の事実については、「礼拝儀講話」⁽¹⁰⁾にもみえてい